

IV 丹沢大山版環境教育学習の基本方針と推進方向

田畑伊織¹⁾・糸長浩司²⁾・藤沢直樹²⁾・池野正³⁾

Principles and Direction of Environmental Education and Learning in Tanzawa-Oyama

Iori Tabata, Koji Itonaga, Naoki Fujisawa & Tadashi Ikeda

要約

丹沢大山地域が抱える多岐にわたる複合的な環境問題を改善していくうえでは、個々の再生事業の展開だけでなく、広く県民が丹沢大山地域のおかれている状態を理解し、丹沢大山の自然環境資源から享受する恵みを守り、自然再生を担う人材を育成していくことが必須である。本稿では、地域再生調査チームの分科会であるツーリズム・環境教育学習グループが調査研究の過程で抽出した丹沢大山地域の恵みとそれを生かす人材の情報を下に、丹沢大山地域を対象とした県民のための総合的な環境教育学習の基本的な方向について検討した。丹沢大山地域の自然資源、地域文化歴史資源の恵みを、誰に、どうやって伝え、学んでもらうか、また、その担い手の育成を目的とした、「丹沢大山版環境教育指針案」としての一覧表を整理した。そのうえで、丹沢大山における環境教育学習の基本方針と推進方向を考察した。

1. はじめに

丹沢大山地域は、都市部から 50km とアクセスしやすい位置にありながら、豊かな動植物資源が数多く残っており、さらに神奈川県の水源地域としても重要な役割を果たしている。一方で、大気汚染やブナハバチの大量発生、土壌乾燥等に起因するブナ・モミ等の立枯れ、農作物への鳥獣被害、登山・観光利用による植生退行、ごみ問題、し尿による水質汚染、人工林荒廃等、多岐にわたる複合的な問題を抱えている。これらの解決のためには、丹沢大山地域がおかれる問題を理解し、丹沢の恵を守り、自然再生、地域再生を担う人づくりを目的とした環境教育学習の推進が必須である。本稿では、地域再生調査チームに設置された分科会である「ツーリズム・環境教育学習グループ」の所属調査員が、調査研究の過程から抽出した丹沢大山の自然資源、地域資源が持つ魅力を生かし、それらの資源から誰が何を学び、またそれらを伝える人材育成に関する総合的な環境教育学習の枠組みの一覧表をまとめる。そのうえで、丹沢大山における環境教育学習の基本方針と推進方向を考察する。

2. 方法

主にグループ内の調査員によるワークショップ形式(以下、WS と略記)での全 7 回の検討会を通じて丹沢大山地域における環境教育について、平成 16 年度及び平成 17 年度の調査の結果も踏まえた上で整理された事項を、「丹沢大山版環境教育指針案」として一覧表としてまとめる過程をとった。

3. ワークショップ形式での検討内容成果

(1) 第 1 回 WS : 2005 年 6 月 11 日実施

丹沢大山地域での環境教育のシナリオを検討するというねらいでワークショップ形式の検討会が開催され、まずは「環境教育」等の言葉の定義、その考え方や現在の検討事項の整理等を行った。そして、自然再生に加えて人間の経済活動も含んだ地域再生の視点も加え、「すべての恵

みは丹沢から」というテーマのもと、丹沢大山版環境教育のねらいを「丹沢の恵みを守り育てる人づくり」とまとめた。

(2) 第 2 回 WS : 2005 年 7 月 4 日実施

「丹沢の恵み = (環境教育における) 素材・資源」及び「人づくり」として誰を対象にするのか(環境教育の対象者・学ぶ主体)が検討された。まず、「丹沢の恵み」については、要素を出し、それらを分類、以下の 8 項目に整理した。

- ①水 (滝・湧水・地下水・雨・河川)
- ②景色 (滝・眺望・四季の花・紅葉・ブナ林)
- ③森林 (自然・土・ブナ林・人工林・里山)
- ④産物 (木材・温泉・食べ物・鉱物)
- ⑤文化 (山岳信仰・村並・祭り・里山)
- ⑥アウトドアフィールド (立地条件・親水性)
- ⑦生き物 (種・多様性)
- ⑧地形・気候 (雪・雨・ランドスケープ・地質)

また、対象者・学ぶ主体についても同様に以下の 8 項目に整理した。

- ①登山者 (団体・個人)
- ②観光客
- ③地元 (地元でなりわいとして生計を立てている人)
- ④市町村 (行政・社会教育)
- ⑤無関心層
- ⑥指導者・研究者
- ⑦丹沢への受け入れ業者 (旅行会社・宿・施設)
- ⑧学校教育というエリア (昨年度の調査で今後環境教育の主要な展開の方向性の一つとして挙げられた)

「丹沢の恵み」と「学ぶ主体」のそれぞれ 8 項目をマトリックス表でまとめることが提案された。

(3) 第 3 ~ 4 回 WS : 2005 年 9 月 19 日, 10 月 14 日

マトリックス表の原案が示され、その形式と記述内容について検討した。「丹沢の恵み」を通して伝えたいテーマ、「学ぶ主体」に対して伝えたいテーマについてそれぞれ 8 項目ごとに丹沢大山版環境教育のねらいにつながる形で検討し、「丹沢大山版環境教育指針案」の枠組みがほぼ決定した。

(4) 第 5 回 WS : 2005 年 10 月 22 日

1) 自然教育センター 2) 日本大学生物資源科学部 3) 丹沢大山ボランティアネットワーク

「丹沢大山版環境教育指針案」マトリックス表のなかの個々のマス目の方針について検討された。更に、学ぶ主体それぞれに対する環境教育の進め方としての「仕掛け・手法・手段」について付加することとし、本調査結果をもとに記述が加えられた。

(5) 第6回WS：2005年11月28日

前回に引き続きマトリックス表の個々のマス目の記述方針について検討された。この中で、表の各マス目には現状と今後の展開案が記述されることとなった。また、学ぶ主体それぞれについて「(現状で)環境教育を担う主体」「(再生目標としての)理想像」を表に加えることが提案され、記述が加えられた。

(6) 第7回WS：2006年1月27日

「丹沢大山版環境教育指針案」表の記述内容について、昨年度・今年度の調査結果をもとにさらに検討が加えられた。情報の追加、他の調査事項や提案事項との調整を加え、表として完成した(表1)。

4. 丹沢大山版環境教育指針案

表1に示す「丹沢大山版環境教育指針案」については、平成16年度及び平成17度の調査結果を反映しながら、ツーリズム・環境教育グループの調査員によるワークショップ形式の検討会でまとめたものであるが、より現実的なものにするためにはさらなる内容の検討が必要であると思われる。特に「丹沢大山の恵み(環境教育の素材・資源)」については、その整理とそれぞれのねらい(伝えたいテーマ)について、各調査グループの協力を得ての情報提供・見直しが見込まれる。これは具体的なプログラムの作成や展開を考えるときには必要な作業である。また、この指針案を誰が(どこが)中心となってどのようなネットワークで展開していくのかという実際に動き始めるための検討も必要である。

実際、「仕掛け・手法・手段」に関しては、現在の神奈川県自然保全センター内に環境教育推進に関係する部署、もしくは担当を置き、施設や団体のネットワークづくりとそのコーディネートに当たるのが妥当であると考えられる。更に、具体的なプログラムづくりもしくは現在あるプログラムの指針案にもとづく整理と、指導者の育成もしくは現在の各団体・施設のになう部分のポジショニングをいかに進めるか、また、それらを含めた丹沢大山版環境教育の情報を一元化し、いかに提供していくかの仕組みづくりが必要である。これらの点について、今回の総合調査の成果である総合的な組織としての丹沢再生委員会内に、環境教育学習分化会等を設置すること、また、県庁行政内部での教育分野と自然再生分野との協働による組織的対応が緊急に必要となっていると指摘できる。

5. おわりに

(1) 丹沢大山版環境教育学習の基本方針案

「丹沢大山版環境教育学習」の基本方針案を以下として提案したい。「丹沢大山地域の自然の再生、地域の再生に関心のある人達を育て、また、再生に積極的に取り組む人達を育て、その人達が協働する場を持続的に提供していく。丹沢の多様な恵みとその保全再生、麓での暮らしの意義を実感・体感できる環境教育・学習とその情報の持

続的更新と発信をする。」

以上から、環境教育とそのための情報発信に関する基本的目標を「丹沢の恵みを守り育てる人を育成する」とした。多様な生物が生息している丹沢。人間活動の影響により存続の危機にある自然、多様性の危機を抱える丹沢。一方で、その自然の荒廃は、麓の鳥獣被害を伴い、山麓での人間居住環境の危機的状況にあり、人間による身近な自然的確で持続的な管理と利用の再生も必要となっている。

丹沢地域は、県の水源地域としての価値と意義を持ち、その安定的で質の高い水の確保、安全、安心な水環境の再生が重要であり、この点に関して、県民の幅広い理解、現場を訪れることで体感的な理解を深める必要がある。また、麓集落では、かつては丹沢から多くの生活、生産の糧を得た暮らしをしてきたが、その関係性が希薄化する今日、改めて、日々の暮らしの中で様々な自然の利用法の智慧を伝える。自然との「つきあい方」として地域に根ざした文化・歴史を伝えることを地域ぐるみで進め、また、新しい山麓でのエコロジカルな暮らしの魅力を創造し発信していくことが求められている。大都市近郊にありながら、山岳、森林、溪流、麓の山村の暮らしとなりわいの再生の意義と、その具体的な体験、学習の出来る機会と場を提供していく場として位置づけた。

(2) 環境教育学習の推進方向

以上の丹沢大山版環境教育学習を推進していく上で、以下の具体的な事業展開を提案した。

A. e-TANZAWAでの環境情報発信の一元化・統合化

丹沢大山地域の自然環境と自分の生活は深いかわりを持っている(興味・関心を持つ)ことを広く都市住民に知ってもらうためのe-TANZAWA等での情報・広報活動の推進・情報提供のシステムづくりを持続的に進める。併せて、経済的マーケティングともつなげ、丹沢からの食・木材等の物流システムづくり、丹沢産の情報発信を進める。

B. 丹沢大山暮らし・丹沢環境教育推進協議会

丹沢大山環境・暮らし教育プログラムと教材の作成とビジターセンター、県及び各市町村の環境教育施設の連携による「丹沢大山環境教育推進協議会」(仮)の設置による総合的な環境教育の推進をはかる。人材の交換も活発化させる。既存施設・組織の役割分担の整理・調整・情報発信するための協議会を設立する。まずは、連携のための連絡会としてスタートしていく。

C. 丹沢学会(仮)の設置

地域の自然再生という視点での連携・指導者育成・教材開発、研究調査とその結果の活用が必要であり、生き物、土・水、暮らし・なりわいに関する情報交換のできる、「丹沢学校」(仮)、「丹沢学会」(仮)を設立し、学術的情報、民間情報の交流・交換の場をつくる。e-TANZAWAのネットワークも活用した、eラーニングプログラムも開発する。

D. 丹沢大山山村体験交流事業

丹沢の自然・価値を体感・実感の経験を持った子供達を育てるため、将来の自然再生の人材育成のために、年間(1～6年間)を通じた環境プログラム推進・水源地域への山村留学制度推進・丹沢アンテナスクール制度(都市部の小学校と源流部の連携・交流)を設ける。

E. 丹沢暮らしマイスター制度

麓に暮らす人達に対して、地域の自然・文化には価値

表1. 丹沢六山版環境教育指針案

| 学ぶ主体(主体) | 学び(題材・資源) | 自然・生物多様性 | | 環境・自然史 | | 生物多様性 | | 文化 | | レゾナーの場 | | 伝えたいテーマ(学ぶ主体の関心や学びたいこと) | 習得したい理解像(どんな人物になりたいか) | 習得したい理解像(どんな人物になりたいか) | 仕掛け・手法・手段 | 実施者になりうる母体(連携が望ましい) | 関係となるテーマ |
|-------------------|-----------|----------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------|---------------------|----------|
| | | 生物多様性 | 生態系 | 水 | 地形・気候 | 景色 | 動物 | 植物 | 文化 | 山 | 山 | | | | | | |
| 登山者(団体・個人) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 観光客 | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 都市住民 | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 学校教育(無関心層) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 地元住民(地域別) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 外国人(地域別) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 関係者(どちらかというと) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 指導者・研究員(どちらかというと) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 丹沢への利用者(どちらかというと) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| 企業・自治体(どちらかというと) | 現在(個人) | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |
| | | 種・多様性 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 | 山系・山系 |

があり、町おこし・集客の貴重な素材（伝承・掘り起こし、見直し・再発見、誇りを持つ、来訪者受け入れの態勢・意識）になるものが多くあることを認識してもらい、自然と共生した暮らしの豊かさを再認識してもらおう。そのために、丹沢版の自然共生型の豊かな暮らしについての学習・教育システムを構築する。麓の暮らし、なりわい、自然環境についてのガイド育成（丹沢暮らしマイスター制度）をはかり、地元の価値を案内できる人を育成する。

F. 丹沢なりわい人育成支援事業

丹沢の自然資源、地域資源を複合的に活用した新しい視点からのなりわいをする人達を育てるために、「丹沢なりわい人育成支援システム」をつくる。

謝 辞

本稿での調査・研究に当たりご協力いただいた地域再生調査チームの関係者の皆さまに謝意を表します。

文 献

環境教育事典編集委員会編, 1999. 新版環境教育事典. 700pp. 旬報社, 東京.